

平成30年度第1回弘前市総合教育会議 会議録

日時 平成30年7月25日(水)
午後2時から3時20分まで
場所 岩木庁舎2階多目的ホール

◇議事日程

- 1 開会
- 2 市長あいさつ
- 3 議事
・協議事項 「教育に関する大綱について」
- 4 閉会

◇出席者

弘前市長 櫻田 宏、教育長 吉田 健、教育長職務代理者 前田 幸子、
教育委員 澤田 美彦、教育委員 高木 恵美子、教育委員 村谷 要

◇司会及び説明のため出席した者の職、氏名

教育部長 野呂 忠久
教育政策課長 菅野 昌子

◇その他出席した者の職、氏名

教育委員会理事 奈良岡 淳
学校づくり推進課長 三上 善仁
学務健康課長 中田 和人
学校指導課長 木村 文宣
教育センター所長 三上 文章
生涯学習課長 戸沢 春次

午後2時00分 開会

○市長（櫻田宏）

本日は、お忙しい中お集まりいただきまして、ありがとうございます。

平成30年度第1回弘前市総合教育会議の開催に当たり、ご挨拶を申し上げます。

この会議は、教育委員会制度改革の一環として、市長と教育委員会が、教育の課題やあるべき姿を共有し、連携を強化しながら、教育行政の推進を図ることを目的として開催し

ております。

人口減少と少子高齢化が進む中で、時代の変化に柔軟かつ的確に対応し、弘前市が持続的に発展していくためには、地域を担う人財を育て、将来にわたって活力のある地域づくりを進めていかなければなりません。

本日は、協議案件を『教育に関する大綱について』とし、教育委員の皆様と「弘前市の教育」について意見交換をしながら、教育政策の方向性を探り、教育に関する大綱の素案の作成に繋げてまいりたいと考えておりますので、どうぞ忌憚のない意見を賜りますようお願い申し上げます。

よろしく願いいたします。

○市長（櫻田宏）

それでは、協議に入りたいと思います。

協議事項は、『教育に関する大綱について』であります。

まずは、事務局から説明をお願いします。

○教育政策課長（菅野昌子）

はじめに、『教育に関する大綱』についてご説明いたします。

『教育に関する大綱』とは、「教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策の目標あるいは根本的となる方針」のことを言います。これは、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第1条の3で地方公共団体の長が策定するものとされております。

この大綱は、当該市が教育振興基本計画やその他の計画を定めている場合には、その計画をもって大綱に代えることができるとされており、当市においては、これまで大綱を弘前市経営計画の教育関連分野をもって代えることとしてまいりました。

この弘前市経営計画ですが、平成29年度で計画期間が終了ということで、新しい総合計画につきましても、今年度中に策定予定となっておりますことから、大綱につきましても、新しい総合計画と整合性を図るため変更する必要があると考えており、この大綱を変更しようとするときは総合教育会議において市長と教育委員とが協議することとなっております。

したがって、本日は市長と教育委員の皆様で「弘前市の教育」について意見交換していただき、次期大綱の策定に向けて基本的方向性を確認していきたいと思っております。

○市長（櫻田宏）

大綱の説明が終わりました。

大綱は、これまでは、経営計画の中に盛り込んでいたということでもあります。その経営計画が29年度で終了いたしましたので、これから大綱を作っていくということですが、新しい総合計画も今年度策定中ということで、31年度からの総合計画になるかと思えます。それに向けて大綱を作っていくということでもあります。そのためには、市長と教育委員とで弘前市の教育について自由に語り合っていくということでもありますので、皆様

から自由に意見を出していただければと思っております。

最初に私から。今回、私は、『市民の「くらし」を支え、市民の「いのち」を大切にし、次の時代を託す「ひと」を育てる』この3本の柱で新しい弘前づくりを進めていこうと思っております。『次の時代を託す「ひと」を育てる』。ここが今回の大綱の基本となるところと思っております。

『次の時代を託す「ひと」を育てる』の思いの部分についてお話をさせていただきたいと思っております。

『次の時代を託す「ひと」を育てる』というのは、「くらし」を支える人を大切にするためにも、「ひと」が育っていかないと地域は成長していかないとと思っております。現在の状況は、超高齢化あるいは人口減少が進行しておりまして、社会のあらゆる面で大きな変革期を迎えているかと思っております。その動き（流れ）はますます大きくなっていくというように認識しておりまして、次の次代を担う「ひと」をどのように育てるかには、様々な活性化策がありますけれども、しっかり次の時代を託す「ひと」を育てているという点に重点を置いていきたいなと思っております。

そのためには、今までの学校教育のあり方だけではなくて、地域で人が育っていくような場づくり、仕組みづくりをしていかなければならないと考えております。

地域の中には様々な先生がいらっしゃる、これまでもそういう取組をしてきております。今後、ますます加速させていかなければならない、と思っておりますし、そのために、いろいろなものを見る、または知る機会を増やしていきたい。例えば、就職の関係でいくと、高校に入ってから、学校で職業体験とか学ぶ機会を作っておりますけれども、もう少し小さい、小学校、中学校の頃から、様々な地域にある産業（農業を含めて）、ものづくり、仕組みづくりを行っている方々と出会い、そして知る機会を増やしていく。その中で、自分は将来こういうことをしていきたいなというのが芽生えていくような、そういう地域であって欲しい。そのためには、自分は何をすべきか、それについて詳しく知る、あるいは、基礎的な学力をつけていかなければならない。それを学校で学ぶという、自ら進んで取り組んでいこうというような地域になればと思っております。

そういった意味で弘前全体を「まるごと学びの場」として、いろんな機会でお応えできるようなことを、皆さんと共通の認識を持ちながら情報を交換して、それぞれの果たすべき役割をやっていければと思っております。

そういったことで、今回『「ひと」を育てる』を3本の柱の一つにしております。

私の思いは、たくさん地域にあるものを生かしていく。できれば、マニュアルに添った形ではなく、この津軽、弘前ならではのものを模索しながら、皆さんと一緒に悩み、チャレンジして、その後検証し、より良いものにするような取組にしたいと思っております。

○教育長(吉田健)

「弘前全体がまるごと学びの場に」という、市長の考え、全くそのとおりだと思います。教育委員会ではコミュニティ・スクールという形と非常にリンクしているのかなど。次の時代を考えると、学校の中で得られる知識には限界がある。やはり、利活用できるものは、

どんどん活用すべきだと。教室からどんどん外に出て行く必要があると思います。これは、法律の改定から始まって、学習指導要領の改訂、そういったところの大きな流れだと思います。そういった中で、地域を活用する。弘前を考えて見ますと、歴史と文化が残っておりますし、ねぶたを中心とした地域コミュニティが非常に残っている地域であると。そういった利点を利用してどんどんこれを学校教育と生涯学習(社会教育)を重ねて、両方で育てていこうと。学校教育は生徒だけ、生涯教育は成人ということではなく、共通して目指すのは子どもを育てるということですが、それを通じて地域の方の協力を依頼することで、結果的に地域の方も教育に繋がると、人でまるごと学びというのが、学校教育を核として展開できるのではないのでしょうか。

弘前の利点をどんどん生かしていく、そんな方向に進めていけばいいのではないかなと思います。

市長がお話しましたキャリア教育ですが、高校に入る前の段階(小学校・中学校のとき)から、地域の企業などで体験させる、そういったことをどんどん取り入れることができるような土壌が弘前にはあると感じますので、そういうところを含めて進めていけばいいのではないかなと。あえて言うならば、小・中学校だけではなくて、高校生とか、大学生とか、専門学校の生徒とか、そういったところまで輪を広げて、企業を巻き込んで、いろいろな事業ができればと考えております。

○市長(櫻田宏)

新しい教育長は、高校の先生からなってもらったのですけれども、子どもたちを中心に考えた場合、小学校、中学校、高校、大学と就職を含めて、ここでどのように育っていくのか、全体を見て育っていけばいいのかなということだと思います。

○教育委員(村谷要)

私、商工会議所に勤務させていただいております。地域づくりにおいては、商工会議所があらゆる分野を持っております。実際、今までも、中学校、高校、大学の生徒さん方がいらして、テーマを絞り、対応しながら、地域の学習・体験をしてもらうなど、重要なテーマだと意識しておりました。

地域全体で学びというところで考えた商工会議所の役割ですけれども、ますます時代の流れに沿った形でどんどん前に踏み込んでいく必要があるだろうと痛感しているところです。リーダーシップを含め、様々な模索をしているのが現状でございます。

その中で、今まで取り組んできた事業としては、食と産業まつりの中で将来の夢コンクールを市内の小学校5年生全員参加という形で、絵と作文で夢を表現していただく事業を展開しており、今年度17回目です。非常に大事な場面において、地域全体で、子どもたちのなりたい職業、夢を応援する機会となっております。その中から昨年、AIという視点での、ロボットのプログラミングを、小学校の子どもたちにプログラミングをして動かしてみるコンテストを実施いたしました。

商工会議所の中でも先進的な取組として、総会のときに紹介させていただいております。

今後ますますそういう取組がでてくるものと思っております。

また、今年3回目になりますが、WEBコンテストという、弘前の地域の情報を、中学生、高校生の視点で掘り起こしをしていただいたものを、ホームページもそうですが、SNS制作を支援しているもので、丸2ヶ月ぐらいで全18回ぐらい取り組みながら展開しております。

実際、中学校の生徒さんの技術が非常に高い。初年度、石川中学校の生徒さんに、昨年度は附属中学校。高校生の方も参加しているのですが、感性を含めて、中学生の子どもたちが作ったほうが実は非常に面白い視点を持っております。

石川中学校は、学校の周辺に密着した情報を、近くのお店のこれがおいしいとか、付近の情報を活用した非常に面白いものとなっております。

こういったものをgoogle mapの中に作品を埋め込んで、弘前の中高生の視点で見た情報発信を試みております。この事業は3年目で、工業高校と実業高校が参加していただいておりますが、先月、中学校の校長会のほうに訪問させていただいて説明したところ、パソコン部だとかできそうではないかということでした。石川中学校も来年は早めに情報をいただければ、どんどん参加していきたいというお話もいただいておりますので、どんどん子どもたちの視点でもったものを強めていけるような取り組みをしていきたいと思えます。非常に面白いのが、視点が非常に斬新なところです。通常は史跡とか弘前公園中心にという情報が非常に多いのですが、学校のエリアの情報がどんどん増えると、弘前の新たな魅力に繋がると、子どもたちの観点での新しい弘前カタログという視点で展開していけるのではないかなど。

あと、ファッション甲子園ですね。これは高校生の大会ですが、実は実業高校の生徒が、入試の面接で応募の動機が「ファッション甲子園に出たいから」というお話があり、実際に、中学校の頃から高校生の活動を見ていただいて、進路の一つのきっかけになるようなことがあってもいいのかなという形で展開しております。第13回の大会のときの優勝した岐阜県の高校生ですが、その後、桂由美ブライダル大賞をとっております。また、第4回大会に参加した実業高校の生徒が中三の2階でオリジナルの自分のブランドを立ち上げて、ベビー服ですけれども、ショップを展開している方もいらっしゃいます。どんどんそういった取組というか流れを作りながら、地域には縫製工場も多いので、業界との連携を進めていければと思っております。

今後、いろんな形で小、中、高、大学と流れる中で、層が厚い仕掛けを、学べる場所を地域全体で大人が構築していければと考えております。

Buyひろさきを市と一緒に事業展開していますが、こちらは、小学校を対象に今年度の事業から津軽塗の制作体験、全部は難しいと思うので、研ぎ出しとかそういったものを学校で展開できないかを計画しております。こういったものを展開する中で、今一番気になっているのは、吉野町の倉庫のことです。これからハブになる工事が入ってくるのですが、あの場所を美術館として展示という役割もあるのでしょうかけれども、教育体験の場ということもできるのではないかな。そこを工事段階から先生が見て、安全なルートを確認して、見学コースとして、子どもたちに工事している段階から見ていただいて、出来上がっ

たら、美術の勉強をするというイメージで検討いただければ、完成したときには、体験コース・見学コースとしてできたら面白いのかなと思っております。様々な仕掛けを考え、どう展開するか。地域全体を考えたときに、ハブがあって、そこから商店街だったり、様々な体験ができる学びの場ができたら面白い街になるのではないかと考えております。

○市長(櫻田宏)

地元(地域)で色々取り組んでいる。その中から完成しているものをお話いただきました。教育という視点からも色々なものが使っていけるというお話でした。

○教育委員(村谷要)

吉野町に関しては、2020年春に完成なので、2020年夏のファッション甲子園をあそこでできないか、運営会社さんと協議しております。ファッション甲子園自体、今まで大人が運営してきたので、企画から高校生が携われないか、今月末に運営会社の職員と高校生とで意見交換をする予定です。意外と面白いアイデアが出ると思っております。

今の3年生が20歳になったときに完成します。そのときにデートしたくなるような場所になって欲しいなど。周辺の商店街が、そこを中心はどういう商売ができるだろうか、ビジネスがあるのか、というところを高校生が考えると面白いかと。

○市長(櫻田宏)

この地域で、自分がやりたいことを探しながら、レンガ倉庫周辺で何か自分でやっていきたいことを見つかることができれば面白いかなと。

○教育委員(澤田美彦)

教育の基本はやはり学校教育だと思います。学校には限界がある。もちろん限界があるのですが、学校教育がきちんとしていないとダメだと思う。私のこれまでの経験から言えることです。なぜそう思ったかと言うと、教育には学校教育と社会教育があるのですが、社会教育をやっている人たちは非常に困難なのではないのかなと思うのです。例えば、義務教育が終わって、卒業して色々な学校に入る、あるいは職場に行く、行った後の人たちを見ると、やはりそこで教育する以前にもうちょっと何とかして欲しいなという気があるのです。そのためには、学校のほうで、もうちょっとがっちりやったほうがいいのか、というのが私の思いです。

例えば卒業してしまう。社会でもいいし、町内会でもいいし、老人クラブや介護施設なんでもいいのですが、例えば、私の関連の医療関係のほうにしてみても、在宅医療となっていますが、在宅医療で介護をやる。介護をやるとなると介護福祉なのです。それを医師会のほうでもうちょっと質を高めて何かやらなきゃだめだなとか、色々な計画します。でも、そのときは、これはどの業界でも共通するのですが、きちんとしている人たち、是非来て欲しいなというグループは来ないです。卒業してしまう、社会にでてしまうと強制的にいろいろなことをなかなかできないみたいですね。法的に何かとか、そういったことは

できる。学んでどうのこうのは大人になってからはかなり難しいものがあるのが現実だと思います。やはり、そういう辺りでは強制的にでも教育の中でいろいろなことを経験させる、いろいろなことを知る、そして社会に出すしかないのではないかな。今のところそう思っています。そういつてあきらめてばかりいては何もどうにもならないので、いろんな形で、色々なついでで働きかけて、一人でも多くの人に来るようにはするんです。それでもなかなか集まらない。集めるのが難しい。

そして、もう一つの特徴は、そういうときに結構集まる人は共通しています。町内会の人とか、同じ人がやって来るとか。動く人たちは決まっています。それを直接やらないで、来た人たちに間接的にいろいろなことをやってもらう手段はあるのですが、なかなか歯がゆいところがある。

ここは、強制的に集まっている学校でやはり、ちょっとでもいいから意識付けして、世の中に出してやるしかないのではないかな。

そして、もう一つは、あきらめていないのですが、看護学校に来る学生の中に社会人入試で入ってくる人がいます。やはり、社会人になってもう1回意識ががっちりします。何かやりたいとか、そういう人たちは、ストレートで高校から入ってくる人に比べるとやる気は何倍もあります。例えば、看護国家試験を一つの例にとっても、頭がいいとか悪いとかの話ではなくて、社会人に入ってくる人たちは、昔は頭が悪いほうに分類されている人がたくさんいたのですが、でも、30になって、40になってくれば、18, 9の若い人たちに負けないで、国家試験の合格率がすばらしいです。要するに、自分がこうなりたいということを見つけて、やるということはすごく大きなことです。高校時代に、校長が「自律的学習・他律的学習」で講話したことがあります。他律的学習は、小学校の低学年とか中学校かもしれません、場合によっては高校かもしれませんけど。とにかく、強制的にでも覚えなければならぬ知識とか技術、それは、とにかくいやでも覚える、身につけなければならぬ。それが他律。他律とは他から律する、律せられる、他が律する。それができて自分で勉強するようになって、やらなきゃだめだなとか、ある程度の知識、技術を身につける。その上で新しいことを学んでいく。それができるようになると、自分でできる。それが自律的学習。自律的であればあるほど学習の効果は上がる。

小学校、中学校のとき、あるいは大人になって、自律的に学習できるのは、早いほうが、身につくとおもいます。社会に出てしまっても、自律的学習が必要だと認識してやっている人たちたくさんいます。そういう意味ではいつでもいいのですが、でも学校教育というのは、やはりそういう意味から見てすごく大事だ。ただし、社会においても継続していくことで自律的学習する人が、どんどん出てきます。もちろん、社会のそういうのも必要ですけれども、そういう人を一人でも多くしていきたいです。

ただ、そのときに来て欲しい人が来ない。どういう風にしたら今まで来たことがない人が来るか。参加する意欲がない人が、いかにしたら出てきて、ちょっとでもいいのでこのような場に接してくれるか。そのような機会をどのように作るかがすごく大きな問題だと思います。

もちろん、何をやればいいのか分からないから今の状態なのですが。やはり社会教育の

場では、意識付けがされていないと言え言過ぎかもしれないのですが、そういう人たちがいかに来て、ちょっとでも触れて、そうなんだという場を提供するのはすごく大事だと私は思います。

そのような意味で、卍学とかやっているのですけれども、卍学っていうのは大事です。

私のところで働いていた中央高校出身の、看護学生が横手に行きました。保健師学校があつて、横手に行ったのです。

石坂洋次郎の本を読んだことがあるか？と聞かれたところ、「ない」と言うんです。中央高校で石坂洋次郎のことを教えていないの？と聞けば、「わからない」と言うんです。石坂洋次郎の横手と中央高校との繋がりが、その学生はそのとき理解できない。石坂洋次郎とはこのような人で、嶽のスポーツセンターに行けばあるし、中央高校にいて、葛西善蔵とちょっと大変な目にあつて横手に行ったんだよとか、そういう風に知ったら、石坂洋次郎のことを勉強したんです。

卍学で、このような偉い人たちがいるのですが、あれは多分私が思うに、大人が思う偉い人。子ども達には全然興味がない。だから、弘前の人物史を教えるのに、ただ単に人物を教えるのではなくて、いかに興味を持って読むようになるかを教えるのではないとダメなのではないかなと、その学生を見て思ったんです。

図書館とかいろいろところで企画展など様々な機会を与えていますけれども、その意味が何なのか、大人は分かりますが、子どもはもしかしたら分かっていないのではないかな、と感じました。

卍学をやるときは、そのような意味で、大人というよりは子どもの目線でどのように考えているのかなというのが大事である。ただ、教えることが大事なのは、小さいときに触れていて、ある年代になると、自然に理解します。いつ理解するか。それをいかに早く理解してもらうか。それが大事なのではないか。

先ほど職場体験の話が出ましたが、約10年前から中学校の職場体験をやっています。実は、最初に職場体験をやったときに、四中の校長が私の同級生だったんです。「職場体験をどのようにやればいいのか」と聞かれました。中学生は、たいていのは、1日目は借りてきた猫、2日目はちょっとあいさつできるかな、3日目になるとちょっとやって、4日目、5日目になると本領を発揮するから、1週間提案してみても。私が属するところの中学校(四中)では、職員会議をやったら、全員に反対されました。しかし、四中は4日やりました。当時、他のところは1日とか2日ですが、何年も4日やったんです。そうしているうちに、いろいろなことを、フランクに、あまりかしこまった形ではなく、子どもも自分を出してやれる。今、残念なことに、四中は2日です。他の学校と同じようになってしまった。そのような意味でも子どもたちを社会に出してやるのに、学校は時間的に余裕がないのです。そのようなあたりが問題点としてあるので、そのような意味で何かに出すとかそのような機会を設けるべきと思います。

○教育委員(高木恵美子)

自分と自分の周りのことで話をさせていただければ。

私の息子も高校に行ってもすぐ高校中退して、今、中3の娘もフレンドシップルームに通っている状態ですので、そのような子たちが、特にうちの息子の場合は、小学校6年生のときですけれども、商工会議所の青年部でやっていた、5、6年対象のキッズカンパニー(私はまだそのときに商工会議所青年部に入っていないのですが)をやりたいということで申し込みました。そこで、自ら社長をやりたいと名乗り、敏腕社長だと。青年部の方々には、「お母さん将来楽しみだね」、「息子さんが高校に行ったら、ビジネスアイデアに繋げてください」と言われて私も、青年部に入会したという、息子がきっかけで入ったようなものなんですけど、その息子を見てきた中で、高校で挫折というかそのような形になって、あんなに人前で話したり、まとめたり、アイデアを出したりできた子が、ちょっとした機会でもひきこもった状態になる。うちの子だけじゃなくて、何かのきっかけで、その先が途絶えてしまう子が少ないんでしょうけれども、実際どんどん増えてはいると思います。

そのような子たちを、今の「ひと育て」という点から見て、キャリア教育の点でいけば、かえってそのような子たちのほうが、感性が優れていたり、何か一つにのめりこんだりというパワーというか、力があるように思うのです。うちは、進学校に行ったから合わなかったのかな？本人は何が理由で行けなくなったのか分からない感じですけども、もっともっと小学校、中学校からキャリア教育的なものをもっと体験させて、実感させ、将来こうなりたいというものがもっと早くにできていたら、私も息子もそこを感じれたら、進学校じゃなくて、工業や実業のほうが彼には合ったのかなというのを感じているところはあります。

実際、たまたま娘の体験入学で、昨日、一昨日と工業、実業高校と一緒に体験入学してきました。説明を一緒に受けてきた中で、説明を受けたからこそ分かる部分がたくさんあって、このような内容を中3のこの時期に知って遅くない？と思ったんです。

本当は、中1ぐらいのときから、うちの高校はこのような形で教育をしていて、このような人材を育てて、企業に入っていますというのを、知っていたら早めに筋道が見えてくるのかな。ものづくりをして頑張っている人たち、社会人がたくさんいますよということを知れば、自分もそうなれる、なりたいというイメージができたりする。このことが伝わるかなと思ったところです。体験入学が1年生からできないにしても、高校の方から逆に来て、アピールはできるかなと思います。

娘のほうの立場から言うと、クラスとか学校になじめない子たちにしても、勉強はしなければいけない。でもできない、遅れてしまっただけでいい。でも、課外活動や創作活動が大好きで、人とのコミュニケーションが苦手ながらも創作活動ならば皆と一緒に頑張れる、楽しめる、「楽しい」と言うことばを出すのです。なので、課外活動や創作活動を増やせたらなど、そのような子たちに向けて思うところはあります。

あと、常盤野小中学校が小規模特認校を導入しましたが、学校やクラスに馴染めなかったり、行けなかった子どもたちの保護者からは、今、動き出してどうなっているんだろうか？という声が聞こえてきます。今年の募集もどうなの？ということも最近私に聞いて来た方もいらっしゃいます。学区関係なく行ける学校の認知の仕方が、いまだ一般の保護者にはあまり知られていない。例えば、「馴染めない子にもきちんとケアしています」とか、

「自然の中で地域の方と一緒に馴染める学校です」、「一人ひとり寄り添っている学校です」と大きく謳っていますけれども、現在の学区でなかなかうまくクラスに馴染めない子どもたちも（今すぐには言えないのかもしれないですけども）対応していますというのは、早く言ったほうが、そのような子どもたちの保護者に見れば、選択肢の一つとして、学校を見に行く、体験させるきっかけになる。コミュニティ・スクールという形でも地域と共にというか、特に去年と今年学校訪問に行く中で、市内よりも郊外のある程度少ないところは、本当に地域と共にという形がすごく伝わります。街中にいけばいくほどある程度の、もちろん一生懸命頑張っている保護者もいるのですが、頑張っている保護者は決まっている人というか、ある程度学校と関わりたいと思っている保護者以外の部分は、逆に言えば「さー」としている方たちも多いので、そこをまた、コミュニティ・スクール、地域と共にという部分は学校運営委員を含めてうまく回っていく形を、特に市内中心部とか考えていかなければいけないと思います。

○教育委員(前田幸子)

学校訪問に関して、みんなで一生懸命回って訪問してまいりました。その件に関して報告がてらと言えいいのか、具体的な部分で感じたところをお話したいと思います。

前期7月学校訪問が小学校10校、中学校4校の14校訪問しました。暑い中、子どもたちも一生懸命学んでいると言うか、先生方ももちろんですけども、ひたむきさを感じることができましたし、中学校区を中心にした教育自立圏の構築に向けて着々と確実に実施されてきているなど感じました。教育自立圏を唱える前に、既にやられているところは先ほど高木委員がお話したように非常に多くて、チームワークがびしっとしているなど、地域もスクラム組んでいるな、と言うのを感じることができました。

特にその中でも、私がいつも言っている東目屋の小・中学校です。そこが非常にすばらしいなど。伝統でやってきたのだよと。先ほど大人にやらせられてということもありましたけれども、それだけではない何かを感じる。脈々と受け継いできた。澤田委員がおっしゃられるに、やらせられてやってきたかもしれない。けども、そのことによって自分たちが、これを継いでやっていかなければならないという意識が感じられる。すごいなって思っています。しかも、中学校は、西目屋の生徒たちも一緒になってやっているのです。その中で、小中一貫の「りんご栽培でひとづくり」というのがテーマなんです。ですから、市長がおっしゃるような「ひと」というのを考えている、まさにそれそのものだなど思いました。あの活動というのは、本当にりんごの木に関することは、確かに地域の方々が一生懸命やられていて、それを子どもたちが受け継いできている、「共に」ということもありますけれども、あのりんごを世話して、収穫して、修学旅行で東京に行って、売ってですよ。売る前に、りんごジュースにも、ラベルは美術の時間にデザインさせて、きちんとシステム化されている。先ほどの村谷委員の話でもないですが、きちんとシステム化された枠組みの中だけではない、子どもたちの動きというものが非常にすばらしいと感じます。

ですから、教育自立圏の先進校だなど。でも、東目屋小、中学校ばかりではなくて、私たちが訪問した他の学校も、そのような取組は、新和でもやられていましたし、様々な学

校でやられていたのは、非常に嬉しいなど。ひとつづくりということが、まさに人がつくられていっているなど、それが、教育ノートにあった教育長のセリフではないけれども、点が繋がっていっているという感じがしみじみとしました。

それと、先ほど卍学のこともお話で出ていましたが、逆に私は、自分たちが小さなときは何も分からなかったし、しかも、社会の授業では、九州から始まって習ったんです。弘前のことなんて本当に知らない。何も知らずに外に出される感じなので、今の子どもたちは卍学を通して弘前を知って、他県に行ったときでも、逆に弘前の良さっていうのを感じることができるのかなと。

さらに、学校訪問で、突然子どもたちが、「弘前の本当の天守閣は雷で焼けたんだよ」と逆に教えてくれる。「覚えてくれていたんだ。」という嬉しさが、卍学の中から学んできていることなんだなって。これがひとつづくりの良さだろうし、学びのまちだろうし、このようなことが具体的な形で出てきていることが非常に嬉しく思いました。

まさに弘前そのものが、流行語ではないけれども、「弘前半端ねえ」という感じがしています。

○市長(櫻田宏)

今、ここまで出していただきましたが、少し自由に話し合えればと。

○教育長(吉田健)

これからの計画を見据えて、どこに重点を置くか。個々の事業とか、そういったところも見えていかなければならないのかな。前田委員の話ではないですが、学校を見て、勉強する環境が。ものすごく新しい校舎ですごくいいところも見て来ました。古いところの、トイレが汚いなどと思うところも見てきました。その中で差があってもなんなので、まず学校の環境を整えることはやっていかなければならないのかなと。特にトイレとなると、昔校内暴力がはやった頃は、壊れたら修理しろ。ガラス・電気が壊れたらすぐ修理しろでした。まず悪の温床といいますか、あまり汚いとイメージが悪いので、そういったところとか、今の教育というのは、小学校からでもプログラミングをやったりしているので、ICTとかユニバーサルデザインとかそのような機器がたくさん出ているので、そういったところを街中であっても、周辺の学校であっても同じくやれるような。もちろん予算に限界はあるんですけども、そういったところをやっていって、節約できるところは節約しながら行うというのを大きく見直すことが必要ではないかなと考えております。

○教育委員(前田幸子)

付け加えると、今トイレは着々と良い方向に行っているのですが、ただ暑さが異常な状態になってきています。例えば3市を考えると、青森や八戸はやや涼しいんですが、弘前は京都並に暑いので、除雪だけではなく、逆にそれをうまく使った涼しさをこれからの時代は考えていかなければならないのではないかと。クーラーや扇風機だけに頼るのではなく、4年間の間にこの暑さ対策としてどのようにしていったらいいのだろうと何か考えるだけ

でも、今年は特に大変そうなので。保健室にはこれからクーラーが入ります、コンピュータ室にはずっと前から入っています。せいぜいそのくらいです。学校訪問しても、教室の中に扇風機は学校によって1つしかないところもあるし、扇風機の前に座る子は涼しいけれども、遠い子はぜんぜん涼しくない。これからは、考えていかなければいけないと思いました。

○教育委員(澤田美彦)

この前のテレビでクーラーの設置率があったのですが、公立学校で青森県は3パーセントか4パーセントでした。

○教育委員(前田幸子)

下から3番目ぐらいだったよね。

○教育長(吉田健)

高校は保健室にはおそらく全部あります。あと、図書館とか何箇所かは夏に出てきて勉強させる部屋として、進学校には必ずあります。それもなかなかお金がかかります。

○教育委員(高木恵美子)

暑いところに三十何人もいると、本当にかわいそうです。三十人超えるとやはり教室が辛いですね。

○教育長(吉田健)

9月も記録更新でもものすごく暑くなる予想がされています。文化祭のシーズンということで、少し考えておかなければならないのかなと。各学校に設備を入れるのは時間がかかるので。

○教育委員(澤田美彦)

40年前、東京で夏に窓が開いていれば病院か学校だと言われていましたが、今は病院閉まっていますので、学校しかないんです。

あの暑さの中、子どもたちもそうだと思うのだけれども、教える先生もかなりなのではないかと。

○教育委員(村谷要)

大人は皆クーラーのある部屋にいて、子どもたちが過酷ですよ。

○教育委員(前田幸子)

子どもたちの方が、暑さをうまく調節できないそうで。そして、小柄なほど放射熱を吸収する。

○市長（櫻田宏）

その他ありませんか。

○教育委員（澤田美彦）

看護学校に入学してくる学生の経済状況を時々目にするのですが、シングルマザーとかあるんですけども、家庭の中で育てている人でも、これで本当に暮らしているのか？というくらいの経済状況とか、そういった人たちっていっぱいいるんですよ。その子どもたちというのは、勉強する機会が他の人に比べ少ない。1ヶ月くらい前の新聞に「経済格差と教育格差」という記事があって、やはり成績のいい子の家庭は、職が高くて明らかに高い。その中でも、親がよく本を読む子どもはいい成績だと。

親の経済状況は明らかに影響していると思うので、実際に目に見えないけれども、ちゃんと見える情報にして、そのよう人たちに教育の機会をきちんと与えることが絶対必要だと思います。

○教育委員（村谷要）

NPO法人マザーフィールドの活動を見ていると、かなり厳しい。ヒロロなどでやっていますが、試行錯誤の状態だと。今、シングルマザーと言っていますけれども、お父さんの場合もあり、言ってしまうと一人親なので、どう広げていくか。

○教育委員（澤田美彦）

実はですね、キャリアアップのために看護学校に入ってくるシングルマザーの人たちは非常に手厚い保障があるんです。弘前市もやっていますし、厚生労働省でもやってるし、そのようなものを集めてくると、学校にいる間は、経済的には他の人たちよりもずっといいです。しかし、お父さん、お母さんもいて実は・・・、という人がいるんです。なんか表に見えない気がするんです。

○教育委員（村谷要）

先日校長会議に伺って話をさせていただいたときに、質疑で出てまして、今後どのように仕事をしている最中に子どもの勉強を教えてもらうかが重要だと。

○教育長（吉田健）

地域で考えると、場所ですよ。ボランティアであれば、高校生でも大学生でも募集すればいると思いますので、そういった場所をどのように提供できるか研究していかなければいけませんね。

○教育委員（前田幸子）

それぞれの家庭に事情がありますよね。母だけでなく様々ありますよね、祖父母が見て

いる場合もあるし、全てのことに対応していく。昔は、貧しければ貧しいほど勉強する、立ち上がるだけのパワーがあった。自分の教え子にも、みかん箱を反対にして勉強していた。その子がすごい優秀で。

○教育委員(高木恵美子)

学校教育の中で、きちんと学べて、高校にいけばいいのですが。今、皆、塾に行って高校受験をする、ある意味流れ的になっている部分があるので。

○教育委員(前田幸子)

お金がないと行かれない。その辺を考えていかなければならない。

○教育長(吉田健)

事業をやっているんだけど、もう少し拡大していかなければならないな。

○教育委員(前田幸子)

特認校の、常盤野小中学校ありますが、すごく目玉だと思うのです、弘前市としても。今始まったばかりで、一歩踏み出しただけで、すごく苦勞して、汗水たらして作り上げて、いろいろなことがあって。いろいろなことがあるからこそ、それを解決することによって良くなっていくと私はいつも思っていますが、ピンチをチャンスに変えていくことが大切だと思っています。どのようにして弘前市の目玉にしていけばいいかがこれからの課題だと思っていますし、もし、市長がこれに対する思いがあるのでしたら聞かせて欲しいです。私たちがまだ学校訪問していないので、具体的なところは見えていないのですが。どのようにしていけばいいか、まだクエスチョンなんです。市長の考えや思いがあれば伺いたいと思います。

○市長(櫻田宏)

特認校の話もそうなのですが、地域の人たちがしっかり関わったりとか、専門性を持った人が、あの学校に参加して、子どもたちが育つのに協力していききたいなという気持ちを持った人がたくさんいると思うのです。その拠点、ハブになるような、機能を受け入れるような、受け入れられるようなところになっていくと、その学校に行って、自分のいろいろなものの可能性の何かに気がつけるようなところになればいいのかな。

何をやりたいか、ぜんぜん見つからないと思うんですけども。でも、これが面白いと気がつく機会を作りながら、でもそこに参加することが事実だという。それに気づく子どもたちを多く生み出していければいいな。

色々な場が地域の中にあると思います。公民館活動も最近はなかなか厳しいですけども、ここで面白いことをやっている人がたくさんいます。ただ人間関係がうまくいっていないとかありますが、ゆっくり話をすると、いい取組で、ここまでうまくやってきている方もいらっしゃいますので、これらをつなぎ合わせるコーディネーター役をもう少し欲しい

と考えておりました。

○市長(櫻田宏)

今、お集まりの皆様いろいろとお話いただきましたが、まだ数的に足りない。もっといらっしゃるんですよ。いらっしゃる方々を引っ張って来れるか。全部はできなくても、ここはできるという方々がたくさん出てきて、その人たちの情報を共有できて、ここはお願いしますというような仕組みづくりが非常に大事なかなと思います。

○教育長(吉田健)

まだちょっと材料が足りないので、今後どのような方向になればいいのか。まだ、手探り状態なので、保護者の考えや地域住民に聞いた上で、だけでも方向性は出していかねなければならないのかなと思っています。

○教育委員(澤田美彦)

人口が減るのは考えなければならないと思います。小学校、中学校は何人いるから、このような教育をしましょうとありますが、大学とか専門学校は、数が少なくなるといかにして学生を集めるか、本気で考えます。国立大学がいっしょになって何とか質を高めて学生を集める。ところが、小学校、中学校はほとんど考えてなくてもいいというか、そのようなことがあるのです。成人式に行ったとき、1,800人ぐらい招待状出したそうです。今高校生は1,650人ぐらい、中学校3年生は1,500人、小学校低学年は1,200人なんです。明らかに少なくなっていく。少なくなっていくのに、外から入れようとしてもいくらか増えないと思います。少なくなっていく中で、どうやって教育していくかを必死に考えていかないと。すごく大きな問題だと思います。

○教育委員(村谷要)

常盤野のような小中一貫、全国では公立の中高一貫もでてきていますし、東京都では、2022年から小中高公立の一貫も出してくる予定です。

○市長(櫻田宏)

ここで、昨日届いたお手紙を紹介したいと思います。観光で弘前に来た方が、すごく嬉しかったということです。

道に迷ったら、案内してくれる方の次々の出会いがあったということです。

今の子どもたちが、10年、20年先このような人になって行って欲しいな。今このような状態があるということを私たちはプラスにして、子どもたちに伝えて、親として一緒に学んだことを次の世代に伝えていく、循環の町並みにもっていきたいと思います。

自然にこのようなことができる人たちがこの地域にいるということが教育の場だけでなく、日常の会話の中でも出していければいいのかなと思います。

いろいろな機会にあったことを自分の中に入れていければ、次の一歩が変わっていくと

思います。

○市長(櫻田宏)

以上で、意見交換の場を終わりにしたいと思います。これから教育に関する大綱の策定に向けて素案の作成をしてまいりたいと思います。

もっともっとあると思うのですが、出ていない部分を踏まえながら、少し盛り込んだ形で大綱の素案を作成して、この次の会議で皆さんと議論・意見交換したいと思いますので、よろしく願いいたします。

今日はどうもありがとうございました。